
残骸の騎士の英雄譚

上屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残骸の騎士の英雄譚

【Nコード】

N3876W

【作者名】

上屋

【あらすじ】

戦乱の風が吹く大陸。帝国は戦争の終止符を打つために異界の神を召喚、降神した甲冑、究極の魔導破壊兵器である「異神鎧」を作成する。

しかし、異神鎧は反逆者の手により大陸全土へばらまかれた。それにより、大陸全土の戦争は大きく、深く拡大していく。

五百年後、終戦の傷がまだ言えぬ地リドボアで少年ベレットは、自らを救ってくれた少女を助けるために領主の館へ忍びこむ。

そこでベレットは領主の館の倉庫で一体の異神鎧と出会った

それはかつて最強の異神鎧と呼ばれた「マルドゥーク」

しかしその異神鎧は伯爵と名乗る亡霊の取り憑いたリヴィング・
メイルだった。

これは、これから始まっていく少年と少女、そしてすでに終わっ
てしまった男の物語。

0・楽園は神が作り、地獄は人が作る。

まるで、そうであるべき修正を施したような破壊だった。「この世界は本来は地獄なのだから、まずはこの場所を地獄にしよう」そんな声が聞こえそうな光景が広がる。

焰が猛り狂っていた。崩壊したレンガ造りの建造物は墓標のように街を覆っている。かつて住人達で賑わった教会のシンボルたる鐘は、逆さまの状態で教会の残骸の上へ突き刺さっていた。街の流通の基礎たる並びたつ商店は子供が戯れに潰した泥山のようにひしゃげている。かつて街を造ったとされる偉人の像は、近隣の崩れた家に足先からポツキリと折れて埋もれていた。

大陸、帝国内東部、人口約三千人、第三位の規模を持つ港街、エリオリだった（・・・）場所の中央には巨大な二つのクレーターが死神の双眼のように、寂寥を吐き出していた。街並みは、超巨大な激突の衝撃波に舐め尽くされ、押しつぶされている。

絶望の闇に染み込むように声が聞こえた。それは男なのか、女なのか、老いているのか、幼いのか、それすらもわからない。その声はそれら全てだった。ガレキの下敷きとなり炎に焼かれ消えていく人々の最後の声だ。

消えゆく命が調べを奏でる地獄で、一人の十代になったばかりの少年が立ち尽くしていた。炎に照らされるその横顔にはあどけなさと、血と、泥と、絶望がこびりついている。

必死な思いでガレキから這い出た、僅かな幸運、いや醜悪な悪運に彼は微笑まれた。家族の骸に抱き留められることで衝撃波を軽減、奇跡に近い偶然で生存することが出来た。

「……あ、ああ、あ」

少年の両手が抱きかかえていたのは、彼よりもさらに小さな人影。少年と同じ黒髪に穏やかな眠るような表情、そして赤黒い血にまみれた胴体。破片による主要血管の重大な損傷。

「——フィクス、フィクス……フィクス！」

少年の叫びが紅の闇に溶けていく。弟の名を叫びながら、彼は氷のように冷えた肉体を抱きしめた。流れきった命（血）をかき集めるように、散つていく生（熱）を掴むように、強く抱きしめた。

弟がもう二度と戻らないことは少年には理解出来ている。それでも叫ばずにいられなかった。それ以外この地獄で彼が出来ることはなかったから。

「——ッ！」

声にさえならない叫びと共に空を見上げる。少年の叫びが溶けた夜の星空は、焼かれる街の炎で煌々と照らされていた。

「……あれは」

見上げた空にその巨人達はいた。

昆虫のような羽根を広げる双角を生やした緑青色の巨人、猛禽の翼を持つ獅子頭の赤光色の巨人。業火が照らす夜空を神の力を持つ存在同士がぶつかり合っていた。

「異神、鎧……？」

その存在を示す言葉を無意識に呟く。そして臆気に理解した、この街はあの二体の異神鎧の闘いに巻き込まれ、ボロクズのように蹂躪されたことに。

異神鎧、過去に造られたという異界の神が降ろされた甲冑。神の力を持つ超級の魔導兵器。個人の持つ魔法や戦技を遥かにしのぐ凶悪な破壊力は戦乱を煽り、異神鎧を造る技術方さえ破壊してしまつた。

人の脆弱な意志に、神の力は余りにも強大で、制御し難い。

異神鎧の操者達には別に街を破壊する目的自体はなかっただろう、しかし異界の神の力を持つ異神鎧二体のぶつかり合いに巻き込まれれば当然の如くこうなる。

『運が悪かった』

そうとしか表現できない。神の力をもつ異神鎧の前では無力な人間などアリに等しい。巻き込まれれば逃げ惑うしかない。

上空で、巨人が並び舞う。紅に照らされる星空に新たな星くずの如き火花が舞い散り、消える。

二体の間でのみ働く重力があるかのように引き寄せられてぶつかり、二体の間のみで働く磁力があるかのように反発して離れた。超高速の不規則な双楕円、巨大な力その物のぶつかり合い。

これが異界の神の力を持つ異神鎧同士の間だ。神の力により世界の法則自体を書き換えながら破壊を繰り返す。人の意志で解き放たれる神の暴虐、その前にあらゆる物は破滅する。

「オオオオオオオッ」

緑青色の巨人が緊急停止、薄羽の羽根を広げたまま空中に静止する。虚無を震わす叫びとともに周囲に稲妻が走る。

稲光に照らされる緑青色の巨人、三メートル超の体軀に頭部側面より禍々しく生える湾曲した巨大な角。長く伸びる四肢と鋭い輪郭

を描く全身の装甲は、例えるならば研ぎ澄まされた凶刃、あるいは鋼鉄で作られたのクワガタの無理やりな擬人化。

「距離測定、座標固定、出力レベル4、弾丸材料収集と同時に圧縮開始！」

言葉とともにその全身の装甲表面に複雑な光の紋様が高速で疾駆。同時に地上に異変が起こる。

「……なんだ？」

地上にいる少年もそれに気づいた。足元やその周囲、いやガレキまみれの地面全体が盛り上がり動く。

「なっ！」

やがて残骸を突き破り、飛燕のように大量のなにかが緑青色の巨人めがけ飛び立っていく。

それは少年の目にもはっきりとわかった。釘や金床、建材に鍋、街で使われていたあらゆる鉄が巨人めがけ集っていった。超磁力のアミにより地表の金属を集めている。

まとう稲妻を胸元に集め、無数の鉄材がそこへ吸い込まれ、凝縮していく。

それはまさに超高電圧の渦、プラズマのキュポラ。

「疑似砲身形成、——ぶちかましな、タラニイイスツッ！」

緑青色の巨人、タラニスの胸元より緑の紫電が四本、角柱のライオンを描きながら正面へ伸びる。身長は五倍、約十五メートルの魔力による磁力で形成された弾頭加速用の疑似砲身だ。

照準は赤光色の巨人。絶叫のような号令、怨霊のうめきのような起動音と励起する高圧縮の電子、神の槍が放たれる。

「ッ！！」

赤光色の巨人は発射よりも早く回避動作を開始、体より数倍も巨大な翼を操り軌道を変える。背中の排気管から圧縮空気を発生、さらに錐揉み状の動きをしながら瞬間加速。

すでに赤光色がない空間を緑青色の巨人、タラニスの放った魔術砲撃、電磁加速砲弾がえぐり通り過ぎていく。

初速にして音速の十五倍を誇る砲弾が彼方へと飛びさる。発生したソニックブームにより跳ね飛ばされる赤光色。地上へ到達した衝撃波がガレキごと犠牲者を吹き飛ばしていく。

「うわああああああっ！！」

当然、少年も巻き込まれる。弟の遺骸を抱き締めながら、地面を転がり続けた。ガレキの破片が背中を打つ、打つ、打つ。それでも弟を手放さなかった、手放せなかった。壁にぶつかりながら停止、痛む体を引きずりながら懸命に立ち上がる。耳に走る痛み、どうやら衝撃波の後に来た音にやられたらしい。

「……あ、ああ！」

それでも痛みさえ威に介さず少年は目を見張った。眼前の光景に言葉は消え、存在の意味を失う。

上空に並びたつ巨人達、そこまでは同じ。だがその遙か彼方の背後では遠近感が狂うほどのまるで天を支えるような巨大な爆煙による柱が上がっている。

外れた電磁加速砲弾、その一撃がナリエリの街の遥か向こうに着弾し何もかもを区別無く呵責無く吹き飛ばしていた。ひょっとしたら別の街があったのかもしれない、別の何かがあったのかもしれない、何もなかったかもしれない。ただ今調べる方法は何もない。

放たれた方向が少年とは反対側だったため、少年は生き残れた。少年の側なら確実に死んでいただろう。

悪運は再び少年に微笑んだ。

「貴様ツ！」

赤光色の巨人が叫ぶ。衝撃波に煽られた体を、長大な翼をはためかせ立て直す。

その四肢は猛獣を模した鋭い爪を持つ、背後には尾として生える毒蛇が蠢く。金属で形づくられた翼持つ獅子の獣人だ。

タラニスの周囲で六つの輝き、雷の魔球、球体プラズマが形成。

タラニスの固有魔術「パーソナルアウトスキル」である磁力と電子操作による魔術が赤光色の巨人を狙う。

「沈めよ、パズスの使い手ええっ！！」

タラニスの操者の絶叫。六連のプラズマ球体が、それぞれ歪な光る軌道を描き、赤光色の巨人にパズスに迫る。

パズスの翼が大きく開く。サンド構造になっていた翼が左右それぞれ三枚にスライド展開、左右合わせ三対、六枚の翼となった。

「舐めるな、脱走者！ 短縮起動「ショートコード」防御振動展開！」

ジ イ イ イ イ イ ツ ツ

鳴り響く振動音、殺到するプラズマ球体の輪郭が急速にぶれ、近づくほどに拡散。やがて空に溶けてゆく。

異神鎧パズスの固有魔術である振動制御、制御された超高周振動波がプラズマ球体を形状と機能が維持できないほどに散らしていく。圧縮空気を後方に発射しつつ、パズスの翼が虚空を掴み叩く。反動により弾けるようにタラニスの正面へ瞬間加速、プラズマの残滓をかき分けるように突撃。

「フンッ！」

「チイイッ！」

パズスの轟拳が、タラニスの防御のために出された左腕の装甲を叩き潰す。異神鎧を形成する鋼殻という超金属同士の激突音、破片が舞って地表へ落下、炎の光を受けキラキラと輝く。同時に腕から滴る銀色の液体、巨体の隅々を行き渡る、異神鎧の血液といえる循環剤、「神血」だ。

「デメエエッ」

羽を動かし、急速に後退するタラニス。得意の電磁加速やプラズマ操作による中遠距離に持ち込もうとする。

しかし予測されたパズスの追撃が来ない。タラニスの後退をそのまま見送っていく。

「一撃だ、貴様に叩きこんだあの一撃でこの闘いの大勢はすでに決した」

パズスの操者の宣告が響く。獅子の頭部が開口、金属の牙が覗い

た。

「共鳴振動波数値解析、最適数値設定」

パズスの集音機関は、先程の激突の際の反響音をキャッチ、タラニスの装甲構造と固有振動周期を割り出すことに成功していた。

パズスの固有魔術の振動制御に置いて、それは敵の心臓を握りしめたに等しい。

タラニスもパズスの次の行動に感づく。再び鉄片を集め、プラズマの炉に光を灯す。タラニスの操者に走る予感、次の交錯で全てが決まるだろう。しかし、

「生き残るのは、俺だぁッ！」

闘争者達は自らの勝利以外の未来を信じない。信じる価値は無い。

「アボトウシス・ハウリンゲ
共鳴振動波——滅びの歌を聞きたい、脱走者！」

獅子の口腔から放たれる吼え声、六枚の翼が振動を増幅、収束しタラニス目掛け解き放つ。

タラニスの構成素材に対応する共鳴振動波が空気を歪ませる。到達すれば、その巨体を共鳴振動により打ち砕くだろう。

「死ぬのはテメエだッ！ ぶっ飛ばせタラニス！」

タラニスの体から再び伸びた紫電の線、疑似砲身から光と共に放たれる電磁加速砲弾。

対抗のために撃ち出されるタラニスのレイルガンと共鳴振動波が

中空で激突、両者の中間地点より超・超級の衝撃波が発生。不可視のはずの破壊力が空を歪ませることによりはつきりと少年にも視認できた。

そして、その事実は無力な人間にとって致命の事態を意味する。確実に、そのレベルの衝撃波は周囲にいた少年の命を奪う威力だ。吹き抜ける破壊、舞い上げられるガレキ、人、動物、かつてそこにあつた平和の残骸。少年の眼前まで迫る。

——死ぬ……

固く眼を閉じる。家族の顔は浮かばなかった。例え一時でも、犠牲の上に生き残った自分には祈る理由も、すぐる資格も無いと思えたからだ。

ゴオオオオオオオオオオオッ!!

叩きつけられる魔風、一拍遅れる轟音。

——……生き、てる……？

衝撃を感じない、しかし音は聞こえる。恐る恐る、眼を開ける。

「——これ、は」

眼前に、巨大な人影が立っていた。後ろを向いた巨人の体は青銀の装甲で覆われていた。装甲の隙間から、血脈の如き鮮烈な赤のラインが流れる。三メートルを超える巨体と鋼の体、この巨人もまた、

「もう一体、異神鎧が……？」

巨人の周囲では、半透明の防壁。単分子結晶である巨大な水晶の壁が少年と巨人を包むように半球状に展開されている。クリスタル構造の美しき盾が、少年の命を救った。

振り向く巨人、その頭部に赤く光る両眼。青の巨腕が少年へ伸ばされる。力強い五指が開く。

「私と共に来なさい、ここにいては死ぬぞ」

差し伸べられる腕は、力無く佇む少年を掴む。その声は、凜とした優しげな女性の声だった。

1、再始動する異神鎧（前書き）

死により

私は

生まれる。

ネイティヴ・アメリカン ホピ族の格言

1、再始動する異神鎧

「……………だああッ!!」

鳴り響く低い声に目が覚める。朧気な、霞がかつた意識。

——昔の……………夢を……………見ていた。

遠い昔、かつて経験した死地からの生存の記憶。少年、ベレット・グロウの故郷が異神鎧により消え去った記憶だった。片時も忘れた事の無い、少年の未来を決定した悲劇と出会い。

——久しぶりに、「先生」の声が聞けたな……………

夢の中の青銀の巨人の声を頭の中で反芻する。ベレットの中で、最も安らぎを与えてくれた人物の声だ。

——？……………な……………なんだ？ 何が、何が起こってるんだ……………

霞を払い、覚醒する意識。それと共にはつきりと認識される眼前に広がった光景に彼は絶句した。

レンガ作りの広い地下倉庫、薄暗い照明に照らされた幾重にも立ちふさがる全身甲冑、重装の屈強な傭兵達。彼らの手には長剣、長柄の戦斧「ハルバート」といった戦道具が握られている。

軍勢の奥に控えるはヒキガエルの如き容貌、白髪頭にメガネをかけた男。このリドボアの地の領主、ヘスター・リドボアがいる。ベレットには彼らに見覚えがあった。というか、つい先刻まで自分を袋叩きにしていた相手だ。

そして、

「ベレット！ ベレット！ 生きてるの？ 声を出して！」

ヘスターに両手を掴まれ、拘束された声の主。褐色、小麦色の肌に対を成すような白く輝く銀髪。灼熱に燃える赤眼の両目。小柄な体軀を震わせる少女、ベレットが助けようと決めた存在、シエルフア。

悲壮な声を上げ、少年の名を叫んでいる。整った容貌にうつすらと血のかすれ痕が見えた。紛れもなく打撲後。

——ッ！？ 殴られたのか！ ……こいつらぁッ！

脊椎を熱が走る。血が頭に上るの感じた。

——……あれ、妙だな？

ふと気づく。ヘスターの顔が驚愕の表情を取っているのだ。

ヘスターだけではない、全身を甲冑に包まれ、兜によって表情がわからぬ傭兵達にも明らかな動揺が見える。

——なんだ？ 何に驚いている？

彼らの視線の先にはベレットがいるのみ。やがて少年もその理由に気づいた。

——なんだ、こりゃ？

自分の視界の周りに複雑な緑の光の線が走っている。幾何学的な起動を描くそれらは、傭兵達の動きに合わせ、素早い明滅や収束、脈動を繰り返す。

——索敵視覚化魔術の一種か？　しかもかなり高度なやつじゃ……
そして、視野は高い。普段百六十センチほどしかない彼の背丈より、明らかに視点が上にある。ヘスターや傭兵達を遥かに見下ろした状態から察するに身長は三メートルを越えていた。

——俺は、どうなったんだ！？

巻き上がる混乱。取り乱しながら、顔を触ろうと上げた右腕もすでに彼の細い少年の手ではなかった。

黒の装甲に金線の踊るようなファイアパターンが刻まれた、巨人の如き太い指の揃う籠手と化していた。

「お、俺は、俺は……」

——『何』になったんだ！？

自らの存在の変化、それに戸惑いと恐れ的叫びを上げる直前、

『——取り乱すな、見苦しいぞ、小僧』

聞き覚えのある声に遮られる。それはベレットを包む装甲から振動として伝わった。

「お前は……」

声から記憶が再生される。ベレットの脳裏にこの地下倉庫にくるまでのいきさつが蘇った。

——俺は、あの娘を、シエルファを助けるためにここに来て、そして、

頭の中で記憶が突き刺さるようにフラッシュバックしていく。
大柄な、古ぼけた黒甲冑。その全身を覆う蜘蛛の巣と、埃の層。

右肩装甲についた、小さなシェルフアらしき手形。それがベレットの記憶に焼き付く存在。そしてこの声の主。

—— そうだ、俺はこの悪魔に出会ったんだ……

まだ少年は知らない。自らがいったい何と契約を交わしたかを。まだ少女は掴めない。すぐそこにある自らの希望を。しかし男は掴んだ。すでに終わった自らの可能性を再始動させるための存在を。

これは終わった者と始まっていく者達の最初の出会いの物語。

2、かくして少年は救われる（前書き）

ひとびとのところに

真の平和が宿るまで、

国と国との間に

平和はやってこない。

ネイティヴ・アメリカン スー族の格言

2、かくして少年は救われる

生きるために戦う。得るために奪う。人が不変の業として背負う闘争の呪いは、ここ、エルベイン大陸でも変わらない。

多くの国が泥沼の争いを行い初めた時代、約五百年前に「戦争を終結させる」目的としてリドウイグ帝国にて他世界の神を降神させた魔術兵器が製作された。

他世界の神を召喚、依り代とする鎧に降ろすことにより、超常の力を発揮するそれは異なる神の鎧、「異神鎧」と命名。

異神鎧は計百八体生産され、それぞれが様々な神と能力を有し、帝国を勝利と栄光に導く担い手として期待された。

しかし、状況は一変する。

完成し、装着者との契約をするのみだった異神鎧は今なお不明とされる「造反者」の手により、百八体のうち九十八体を大陸全土に無作為にばらまかれたのだ。

敵対国、地方権力者、無政府主義者、果ては山賊や傭兵達が手に入れた異神鎧は大陸の戦乱と混沌をより深く、より鋭く拡大する結果となる。

約五百年の間に幾多の異神鎧と人が戦い、ある者は生き延び、ある者は碎け散った。

そして戦乱から仮初めの休戦による平和というサイクルを幾度か通過し、蒸気機関の開発などといった文明の技術革新と、共和国や自由主義などの思想変化と時を同じくして戦争の規模は縮小していった。

そして三年前、異神鎧により大陸全土を巻き込んだ五百年近くに及ぶ戦争はついに終了した。大地と人の心に癒える傷、あるいは消えない致命傷を刻みつけながら。

――俺は死にたくない。

横殴りの雨が叩きつけられ、体の熱を奪われる。ぬかるむ土を踏みしめ、ベレットはナイフを構えた。

雨に濡れた短い黒髪、十六才の年齢にしてはやや低い背丈と痩せた体格。各地を旅する巡回商人として一般的な粗末な生地の子色のコートは雨を吸いずしりと重い。

――俺は死にたくない。

大陸の北西、山間の地、リドボア。木々に囲まれた山道、森を貫く土砂降りの雨。厚い雲越しに日が沈む夕方の曇天。そして、剣を持つ男がベレットの前に立ちふさがる。

――死にたくなければ……

構えたナイフが震える。寒さのためではない。ちっぽけな刃先に、己の全てを込めなければならぬ、その現実が刃を震えさせるのだ。しかしベレットには現状を恨む意志も抱く疑問も無い。自らが追い込まれている理由をベレットは正しく理解していた。

男の顔には白塗りの道化の仮面。

服装はベレットと似た物。恐らくは巡回商人に化けていたのだろう。ひよつとしたらそれも本業かもしれない。

目に開いた穴からは、その手に持つ剣より無慈悲な、ベレットの持つナイフより鋭角な視線が有る。

前触れなく男の剣先がブレて、消えた。

——ッ！

とつさに眼前に構えたナイフに、横なぎの剣撃が当たる。痺れる右手を左で抑え、ナイフを落とさないようにする。

迷いない顔への斬撃、疑いようの無い殺意。首元、頸動脈を狙った二度目の斬撃を再びナイフで逸らす。

——……死にたく、なければ！

ナイフと剣の間合いの差、明らかにベレットは不利。しかし仮面の男の動きを確実に読んでいる。当然の話だ。——同じ剣技を習っていたのだから。

——殺るしかない！

三撃目、右脇下の動脈を狙った斬撃をかわしきれず痛みが走る。しかしそれでも前へ踏み込む。服に切れ目が走った。

男の剣を持つ腕を掴み、脇で挟み固定。

無防備な左脇腹にナイフを突き立てる。初めは固い手応え、ブツリと抵抗が途切れ柔らかい感触とともに刃が押し入る。

「があああッ！」

血を吐きながら男が叫ぶ。左手でベレットの右顔を何度も殴りつけた。頬が切れ血が流れる。

——殺るしか、

体重をかけ男を押す。後ろの太木にぶつかり、より深くナイフが突き刺さった。

——ないんだ！

力なく男は剣を落とす。やがて血泡を吹き、動かなくなった。何か、妻らしき名を呟いたような気がするが、ベレットにはそれを覚えておける余裕も矜持も無い。

震える左手でナイフを握ったまま開かない右手をこじ開ける。ナ

イフを草むらに投げ捨て当ても無く森を歩き出した。

——なんで俺は……

戦闘による疲労と負傷、雨による低体温が体力をそぐ。

——なんで俺は、生き延びようとしているんだ…… そんなことを願う資格なんて本当は無いのに……

視界が霞む。足元がふらつく。意識を徐々に喪失していく感覚。

——これで終われるのか、俺は？

足の力が抜け、暗転。顔に触れる濡れた草。

——これで……俺は……

意識を失う最後の瞬間、ベレットは再び目覚めないことを心の片隅で願った。

森に雨が降る。激しい豪雨は、森の中の死闘を隠し、洗い流していく。

雨水が滴る森の中から、細い人影が表れた。ややくたびれた紫の傘。雨の勢いに折れそうな、頼りない傘を両手で握りしめ、森を進む。

年齢は十六才ほど。細い肩、背中まで伸びる銀髪は雨で少し濡れている。ほっそりとした輪郭、整った顔立ち。褐色の肌に朱色の瞳が輝いていた。

しかし、本来なら年相応の輝かしい笑顔が似合いそうなその顔には、言い知れぬ不安と、悲壮な決意が浮かんでいた。

やがて細いその足の歩みを止めた。

立ち止まったまえにはうつそうとした草むら。

彼女の腰まで生い茂る草を手で払う。そこには倒れている人間がいた。

黒髪、巡回商人らしきコートとカバン、そして血痕。年齢は彼女と同じ十六才ほど。

本来ならまず見つけれない深い草むら、その中にいる少年を少女は迷い無く見つけた。

そう、まるで——最初からどこにいるか知っていたかのように（・・・・・・・・・・）

少年を見つけた少女——シエルファ・リーンの顔に浮かんだのは探し当てた安堵ではなく、残酷な何かを突きつけられた悲哀の表情。

「許して、あたしがあなたを救っても……」

伸ばしかけた手を、許しを乞うように下げた。

「う、あ、あ……」

「っ！」

少年、ベレットが呻き声を上げた。無意識に前へ、シエルファの方へ手を伸ばす。シエルファがいる事を知っているからではない。ただ生き延びようとする本能の行為。

——生きようと、している……あたしは……この人を……

シエルファは迷いを振り切るようにベレットの手を掴んだ。強く、自らの決意をつなぎ止めるように。

3、それでもなお生きることになじがみつく。(前書き)

主人公がチート化するのは遅めです

3、それでもなお生きることにしがみつく。

――跳ねる水音、壁際に身を寄せる、影。

殺さなければならぬ。殺してしまわなければならない。

――隠れる。身を縮める。息を殺す。ナイフを強く握りしめる、強く、強く。

そのために自分は育てられた。そのために自分は生きてきた。呵責は無い。後悔は無い。なぜなら、

――入念に仕事のイメージを練る。近づく、確認、刺す、仕留める、逃げる、どこまでも、どこまでも、どこまでも。

そうせねば自分は生きられないから。

――足音に気づき、外をうかがう。鼓動が早鐘を打つ。

高級そうな礼服、低い背丈と華奢な体躯。薄暗闇からもわかる。

輝くような金髪。――貴族の特徴、そしておそらく年齢は十に満たない少年。

後ろを向いているためそれ以上の情報はわからない。だがおそらくはターゲット。

――意を決し、足を踏み出す。ナイフを後ろ手に隠し、足音を消す。自らの存在が暗闇に溶け込むのを感じる。

一瞬で、終わらせる。

――一歩、踏み出す。ターゲットはまだ気づかない。

――二歩、近づく。手を伸ばす。肩に手を書ける。

金髪をはためかせ、振り向いたその顔は、

「……ハッ」

枯れた木目と漆喰。端つこに蜘蛛の巣が見える。古ぼけた天井、それがベレットが目覚めて最初に見た物。

自分が寝ているのは壁際に置かれたベッド。やや古い、毛羽立った毛布が上からかけられていた。

——俺は生きている……のか？

窓から昼の光が刺す。部屋を暖かに、優しく照らした。痛む体の節々に顔をしかめながら上体をおこす。窓の外を見つめた。外に見えるは瑞々しい木々と雲一つない底なしの青空。

雨の中での殺人、その記憶から余りにもかけ離れた、穏やかな空気と光景にしばし呆然とする。

ふと右手を見つめた。鮮やかに脳裏に蘇る刺殺の記憶と感触に泥水のような嫌悪感が湧き上がる。

ガタンッ

建て付けが悪いらしく、派手な音を立て突然ドアが開く。

そこから表れる人物にベレットは眼を奪われた。

日の光にきらめく銀髪。華奢な体に生命力を感じさせる褐色の肌。整った容貌に朱色の瞳。

一般にはあまり無い特徴を併せ持ちながら、どこか沈んだ雰囲気を持つ美しい少女だった。

「……眼が覚めたの？」

静かに、問いかける。一瞬なぜか返答につまりながらもベレットは答えた。

「……ああ、俺は倒れていたのか？」

ベレットの無事を知った安堵からか、少女の表情がわずかに輝くが、すぐに元の憂い顔に戻った。

「ええ、あなたは近くの森で倒れていたのよ。あたしが……偶然、偶然見つけてここに運んだのよ。あなた、なぜあんな森の中で倒れていたの？ 街道からはかなり離れていた場所よ」

助けた側からの当然の質問、ベレットはあらかじめ考えていた答

えを出す。

「さ、山賊だよ。誘拐されたのを荷物取り返して逃げてきたんだ。追いつかれそうになって死ぬかと思ったよ」

終戦から三年たった現在、都市部を外れた地方では元傭兵などの盗賊や強盗の横行は珍しい事ではなかった。

「……それは大変だったのね。あちこち怪我もしていたようだし」

ベレットの右二の腕には包帯、顔には軽い殴打の後がついていた。「悪いな、助けてもらった上、治療までしてもらえるなんて。そうだ、俺一応、巡回商人なんだよ。……あんまり儲かってないけど。

何かお礼を……」

「いらないわ」

「……へ？」

きつぱりとした返答に間の抜けた声を出すベレット。

「そんなものはいらないから、体調が治ったら早くここから出て行つて」

「……えーと、」

——あー、こりゃひょっとして……かなり怪しいヤツだと思われる？

正直、怪しいと思われるも仕方ないとは自覚している。巡回商人など資格がなくとも名乗れる職業だ。というよりベレットのような根無し草が名乗る職業は十中八九それだ。

「あ、あのさ、俺別に怪しいヤツじゃないし、ちゃんと礼はさせて

……」

「……別にそうじゃなくて、怪しいとか怪しくないとかは関係なく早く出て行ってもらいたいの」

「……あ、あーわかった。うん」

——こりゃ極度の人嫌いつてやつか？

どうにせよ、歓迎されていないなら長居はしないほうがいい。

ベレットはゆっくりとベッドから降りようと体を動かす。しかしふと、あることに気づいた。

——服、変わってる……

いつもの巡回商人の粗末な服ではなく、大きめなサイズの農夫の普段着だ。

「……あのー、俺の服は？」

「雨に濡れてたから、脱がせて洗ったわ。それは父さんの服」

「……あー、そうなんすか」

——つーことは俺思いつきり裸見られてるじゃねーか……

気まずさに頭をかきながら、立ち上がろうと両足に力を込めた。
しかし、

——あらっ？

体勢がゆれ、フラつく。そのままベッドに尻餅をついた。

——くそ、立ちくらみか……いや、体力が戻ってないんだ。

近くに寄った少女がベレットを見下ろす。

「……その分じゃ、あと二、三日はだめそうね。出て行くのはそれまで待つわ」

その表情には先ほどと同じ憂いと少しの焦りが見える。

「……悪い。あー、あとさ、遅れたけど俺はベレット・グロウっていうんだ。君は？」

少女の朱の瞳に寂しさがよぎる。

「あたしの名前を聞いてもどうせあと少しで出て行くんでしょ。…

…だったら教える意味もないんじゃない？」

——うわあ。やりにくいな、コイツ。

内心で困りながらも、一応は身につけた世渡りの技として顔にださず話を続ける。

「——それでもナナシノゴンベじゃ味気ないだろ？」

「……わかったわ。でも教える以上、————忘れないで覚えていて、ベレット。あたしはシエルファ。シエルファ・リーン」

シエルファの顔に微笑が見えた。——気がした。

「ああ、わかった。シエルファ・リーンな。忘れないよその名前」
力無く、ベレットは返事を返した。

4、ただ穏やかに日々を過ぎて（前書き）

ひとに与え、与えられるのが人生。

ネイティヴ・アメリカン モホーク族の格言

4、ただ穏やかに日々を過ぎて

——とは言っただけだねえ。

ベレットはベッドの中で嘆息する。

彼女に助けられてから二日たった。体力はある程度は戻ってきた。

——すぐ外を出歩くのはヤツら（・・・）に見つかる可能性がある。体力が完全に戻るまで、後二日は居させて貰いたいんだが……

シエルファとは少し会話をしたが、ここに住んでいるのは彼女だけだという。畑をほそぼそと山の作物を時々町に売り生計を立てているそうだ。

——化粧づけは無いけどなかなか顔はいいし、ひよつとしたらどこぞの金持ちの愛人かなんかとも思ってたんだが……

シエルファの生活には驚くほど他人が絡まない。

訪ねてくる人間も無く、シエルファから出て行くこともほぼない。人と関わることを恐れるように避けている。

——……まあ、本当に人が嫌いで怖いなら俺なんか助けないだろうけど。

ふと、窓から彼女が見えた。切り株の上で薪を割ろうとしているらしく何やら庭で準備をしている。

——一人で暮らしてるなら色々やらないといかんわけだな。

薪を置く。そのまま鉈を両手で持ち、高く振り上げ、

——……え？

「りゃあっ！」

愛想が無い普段からいまいち想像のつかない、なにやらかわいらしいかけ声を上げてふりおろす。

しかし鉋は薪を外れ、切り株にめり込む。

「くっ、この！」

四苦八苦しながら鉋を引っ張る。完全に扱いきれなくて振り回されているようだ。

「よっ！ と、わっ！」

今度は勢い余って後ろへ尻餅をついた。銀髪がかき乱れ、輝く。どうも力仕事は苦手らしい。

「……う、うー」

呻きながらも立ち上がる。再び鉋を構えた。ガッツはあるようだが、目が少し涙目だ。

——……見てらんねえなあ、おい。でもなあ、どうせ早く出てけって言われてるしな。下手に手伝っても嫌がられるか？

あまり深く関わってはいけなかもしれないとベレットが胸中で決めかけた時、シエルファは再び鉋を振り下ろした。

まるで慈悲をかけるように、鉋は薪を避け、切り株へ食い込む。

シエルファの涙目がより強まった。——気がする。

——……あー、

「だからな？ 力任せじゃだめなんだよ」

五分後、ベレットは庭で鉋を振るっていた。

切り株に薪を立てる。鉋を軽く落とし、刃をめり込ませた。

「よっ」と

鉋を持ち上げると一緒に薪も浮く。そのまま切り株に叩きつけると、刃が深く刺さる。パカンと小気味良い音をたて、薪が垂直に割れた。

「ほらな？」

傍らのシエルファが目丸くしてこちらを見ていた。

「金がないと、人家の薪割りのバイトとかしてたんでね。こういうののコツはつかんでるのさ」

「……巡回商人なのに？」

「……全ての商人が商売しかしてないと考えるのは大きな間違いなんだよ、シエルファ」

実際、ベレットのような根無し草は商人を名乗りながらも訪れた土地の雑業を請け負うことも多い。それだけ巡回商人は真つ当に個人店を持つ商人とは違う立場だ。もう一度薪を立て、刃を落とす。「両親とか親戚とかこういう教えてくれなかったのか？」

持ち上げ、叩きつける。小気味良く薪が割れた。

「母さんは私が生まれた時に、父さんは一年前に死んでいるし、他に親戚は居なかったから……」

「あ、そうだったのか……ごめん、うかつだった」

庭の片隅に、盛り土に石碑らしき石が置かれていた。おそらく、シエルファの父親。

——親戚もいないつーことは……こいつはひとりで父親を弔ったのか。

「……いたい、この華奢な少女のどこにそれほどの気丈さがあつたのか。それとも、弔ったことでその気丈ささえもすり減ってしまったのか。」

「別に、あなたには関係ない事だし気にはしないわ」

そう答えるシエルファはベレットから顔を背けていた。

「……あのさ、俺も両親いないんだ。ガキの頃、戦争で死んじまつてさ」

「……………」

——まずったなあ。せつかく緊張が取れてきたと思つたのに……失敗を忘れるために薪割りを続ける。

——大体空気読みや良かったんだよ。無駄に話そうとするから。

「あ、あの」

——無愛想なのはなんか理由があるってちょっと考えりやわかるだろうが、バカか俺は。

「あの、ベレット!」

「……えっ? なに!？」

初めて聞いたシエルファの大声に驚き、後ろを振り返る。一輪車のハンドルを握った彼女がいた。一輪車の荷台には割られていない薪が山ほど詰まれている。

「こ、これもお願いできるかしら!」

——顔背けてたんじゃなくて、その薪の方を見てただけか!

「だ、ダメかしら! でで、できればいいんだけど!」

更に大声でまくしたてるシエルファ。たまらずベレットも止める。「ちよ、ちよっと、わかつたって! そんな大声ださなくても聞こえるから!」

シエルファはハツとした表情をする。そのまま顔を気恥ずかしそうに伏せた。

「……ご、ごめんなさい。あたし人に頼み事したことなくて、どういったらいいかわからなくて……」

やはり人と離れた暮らしの弊害というやつか。

「ああ、わかつたから。これぐらいなら幾らでも……」

「ほんと! ありがとう!」

ベレットの手を握り、シエルファが笑う。花が咲くような、心を溶かすような、生命力に溢れた瑞々しい自然体の笑顔。

——なんだ、そういう顔も出来るんじゃないか。

一瞬呆けるベレット、シエルファはそのまま話を続ける。

「じゃあ、あれもお願いね」

彼女の指差す方向には更に山とつまれた薪。

——……俺、一応はまだ怪我人なんだけどなあ。

結局、薪割りを終えるのは日暮れまでかった。しかしシエルファとの距離は縮まったようで、ベレットの前での表情や動きの硬さは取れて見える。

——肩と手首が痛え。

古びた木製の椅子に腰掛け、テーブルに腕を乗せる。

窓の景色は暗く、森は茜色のベールに包まれている。シエルファの家は全体的に老朽化が進んでいた。それでも手入れは欠かしてないのだろう。室内は小綺麗に掃除され、整頓されていた。

テーブルクロスには細かな刺繍が施されていた。新しい物に見えることから作ったのはシエルファだろうか。

キッチンの向こうから湯気に乗って良い匂いが漂ってくる。機嫌がいいのか、シエルファの鼻歌まで聴こえてきた。

どこか懐かしい食卓の光景がベレットの胸を締め付ける。

——不思議なもんだ、俺はこんな食卓なんぞ囲んだことは一度も無いのに、なぜか懐かしいと思う……

「ベレット、できたよ」

シエルファの声に気づき、慌てて顔を上げる。

「あ、ああ、ありがとうシエルファ」

ベレットの前に出された湯気を上げるシチューとストープで炙られた黒パン。食欲をそそる香りが沸き立つ。

「じゃあ、いただきます」

シチューにスプーンをつけ、具をすくい上げると薄いピンクの塊を見つけた。

——……お？

「肉、入ってんだね」

今まで出された食事はほとんど野菜シチューか野菜スープだった。「塩漬けのウサギ肉だけだね。きよ、今日は薪割り手伝ってもらったし」

シエルファは黙々と黒パンを口に運びながら、照れ隠しからか顔を背けた。

——よし、かなり俺のイメージは良くなっているはずだ。薪割りもこの交渉のための布石に過ぎない。

目的を果たすため、意を決し声をかけた。

「な、なあ、シエルファ」

「なに？ ベレット」

「悪いんだけど、体調がまだまいちなんで、あともう二、三日居さしてもらえないかな？」

明らかにシエルファの雰囲気が変わった。

一瞬、空気に見えない亀裂が走るような感覚。いや、見えないだけで実際に亀裂が入っているかもしれない。

ゆっくりと息を吐き、顔を伏せたままシエルファが喋る。

「——あたしは、二、三日で出て行って下さいと言ったよね、今日は三日目なのよ？」

シエルファの声色は冷たい。

——失敗した。もう少し好感度上げるべきだった！

「あ、うんたしかにそうだったな……」

「言・っ・た・よ・ね・？」

静かに、しかし強く言葉に力を込めるシエルファ。

「……はい、そうです」

力無くベレットは敗走した。外に出るのはもう少し遅らせたかったが仕方ない。ヤツらに見つかる可能性は少しでも下げたかったのだが。

「明日には出て行ってもらえる？」

シエルファの態度にはどこか焦りが見える。

「……はい」

力無く、ベレットは返事をした。無心でシチューを口に運ぶ。
——でも久しぶりに食う肉はやっぱりうまいなあ。

静かに力をこめマッチをこする。薄暗い部屋に鬼火が灯った。
リンによる人工の鬼火で男の顔が照らされる。年齢は四十代前半、
オールバックにまとめられた、赤錆色にも見える色あせた赤毛。突
き出た鷲鼻。瘦けた頬。細い両目は一見柔和な印象を与える。だが
奥にある隙の無い眼光、いわゆる「人殺しの眼」を見ればその印象
は掻き消えるだろう。

背は高く、百八十センチをゆうに超える。胸や肩など急所のみを
覆った軽量の鎧に身を包んでいる。瘦身に見えるが、全身には巻き
つく荒縄のごとく締まった筋肉が着いていた。

限りなく精巧な哺乳類の擬態をした蛇、それが男を見た者が抱く第
一の印象だろう。

手で火をおおいながら、口元の紙巻煙草にそつと点ける。

鬼火が一つ増え、鬼火が一つ、振られて消えた。

眼を閉じゆっくりと煙を吸い込む。やがて甘露の余韻を吐き出す
ように、煙を吹き出した。

「……ガドスくん」

薄暗闇から投げかけられる中年の男の声。やがて向こう側から現れる、撫でつけられた白髪頭とヒキガエルを連想させる顔つき。短軀でありながら太い腹周り。豪華な貴族の服が返って下品な印象をかきたてる。

リドボアの地の領主であり、館の主人。ヘスター・リドボア、それがこの中年の名前だ。

ヘスターの持つ燭台の灯りが穏やかに周囲を照らす。一面を強固なレンガが覆う、一室だ。

「何か御用で、雇い主殿？」

ヘスターを一瞥もせず、ガドスは煙草を肺で味わうことを止めない。

その表情は至福を歌う、満足げなそれだ。卵を飲んだ蛇が表情を表せるなら、こんな顔をするのだろう。

「君は一体、あれをどう始末するのかね！？」

ガドスとは対象的にヘスターには焦燥と嫌悪が見える。

「始末も何も、まだ俺の部下が楽しんでいるでしょう。雇い主殿も今宵は身分を忘れて一緒に楽しんできてはいかがですかな」

「ふ、ふざけるじゃない！ あんな血生臭いことを……」

ゆっくりと振り返るガドス。細目の奥が鈍く光る。

「血生臭いといわれましても……」

煙草を床に落とす。足をその上に落とした。

「その血生臭いことの前段階で、雇い主も散々楽しんだじゃありませんか？ 前回も、更に前の回も」

吸い殻を踏みにじる。ぐじぐじと体重をかけて。

「その前も、そのまた前も、楽しんでおいでだったじゃないですか？ 少しステップが進んだくらいですよ」

ガドスの引きつった笑みが強まる。

「しかし殺すなど、しかもあんな殺し方を……！」

「そこらの娘を引っ掛けて、遊んでバラす。戦時の傭兵の慰みというやつですよ。ああ、処理のほうは部下がきちんとしますし、別に

ちよいと人がいなくなつたぐらいであなたに意見する人間はこの地にはいないでしょう、領主殿？」

吐き気をこらえるリドボアの青い顔。その顔が直前まで彼が何を見ていたかを物語る。

「戦争は、戦争はもう終わった！ お前らもやり方を変えねば……」
「終わりませんね」

ガドスが見つめるのはリドボアではない。行き過ぎた先にある夜の闇、いや虚空。

「終わりませんとも。帝国が宣言しようと、お偉方がフタをしようと、弱者がそれを望もうと、強者が終戦を掴みえぐりとろうと、終わりませんよ。それが戦争です。第一、終わつてたまるものですか、俺は傭兵なんですから。戦争を死ぬまで楽しみますよ」

当たり前の事を淡々と、堅実な人生設計を語るように落ち着いた態度。眼光に狂気は無い、しかし確実にこの男には人として有るべき感性も無い。

「……お前達は飼われている立場だ。それを忘れるな」

「ええ、忘れませんとも。雇い主殿。しかしお忘れ無く。犬とて恩を忘れぬのは飢えていない間だけです」

ガドスの圧力に耐えきれず、ヘスターは目を逸らす。最初は組みし易そうな男だったはずだが、気がつけば主導権を握られていた。ガドスの悪徳か、ヘスターの根の弱さか、あるいは両方のせいか。

「……それから、前にも話したが、教会から手配されている人間がこの近くにいるという話は覚えているな？」

「ああ、そういえばそんな話がありましたね。どうせ、教会の裏金ガメたかなんかした司祭崩れでしょ？」

ヘスターは胸元から一枚の封筒を取り出す。うやうやしく中の書類を見せた。

「いや、教会の情報によると娘だ。特徴は銀髪、褐色。歳は現在なら十代半ばほど。移民で来たノルヴ族の人種の少女だ」

「娘？」

ガドスが眉根を寄せた。

「天下の教会がたかが移民の小娘になんの御用で？ そりゃ銀髪のノルヴ族とは珍しいでしょうが」

戦争中、帝国は兵員の確保の為、周辺遊牧民などの少数民族の定住化、帝国民化を推奨または強制をしている。ノルヴ族もそのうちの一部族だ。

ヘスターは苛立つようにガドスの疑問を押しつける。

「貴様にそれを知らせる義務は無い！ お前は私の獵犬として義務を果たせ！ この娘を生きて確保する、それだけ考えろ！」

ガドスの喉が不気味に音を立てる。喉を鳴らし笑っているのだ。「そうですね、出兵の戦費、かなり教会から借りているそうですね。この辺りで恩を売らないとマズいでしょう？」

長く続いた戦乱は地方貴族にも打撃を与えた。中央への服従として出兵の義務を負う彼らには先立つ戦費は常に悩みの種である。

帝国国教の中枢である教会からの借財で戦費を賄う地方貴族は少なくない。ヘスターもまたその一人だ。もともとそうだった原因にはヘスター自身の無能や放蕩もあるのだが。

「余計なお世話だ！ それ以前になんでお前がそんなことを知っている！」

心配事を突かれ、外面も繕えずうろたえるヘスター。

「いやね、我らが雇い主殿が思いつめているようにでしたから、当たりをつけてみただけですよ。昨今の地方領主はどれも似たようなもんですから」

飄々と、薄ら笑いを浮かべる蛇。

「まあ、ただの確保なら簡単なもんですよ。腹ごなしにもなりやしない」

「……確保だ。生きて引き渡すのが条件なんだぞ」

「わかってますよ、雇い主殿」

ガドスの右手首、獣の四肢を持つ、輪を描く蛇を模したブレスレ

ットが闇の中で鈍く光った。

5、暗転と疾走

「これでよし、と」

カバンに荷物を詰め込み、ボタンを閉じる。コートを着込み、ベレットはしみじみと三日間を過ごした部屋を見渡した。

朝日が森の木漏れ日となり、窓から差し込む。やや傷んだ壁に蜘蛛の巣がある天井、建物自体は古い山小屋と言ったところだ。しかしシエルファの手の届く範囲ではどこも丁寧に整頓されている。

——ま、ずっと居られるわけじゃ無かったんだ。早めにおいとましたほうが良かったよ。

正直、体はまだ少し痛む。だが旅に出られないほどではない。

——できるだけ街道を避けて裏道をたどれば、奴らに見つからずに

……

ガンッ

「うおっ！」

突然の音に一瞬硬直する。シエルファが以前から立て付けの悪いドアを押し開けたのだ。

「わっ！ とっ、とっ！」

力を入れすぎたのか、シエルファが勢い余ってたたらを踏む。

「おい！」

倒れかけた彼女を助けるため、ベレットは飛び出す。

「キャッ！」

シエルファの短い悲鳴。床に挟まれる形で、滑り込んだベレットが倒れる彼女を抱き留めた。

「……ご、ごめんなさい」

「あ、ああ、別にケガがないならよかったよ」

互いによるめきながら立ち上がる。シエルファの顔が少し赤くな

って見えた。

「きよ、今日で出ていってもらえるだよね？」

気まずさを断ち切るようにシエルファが訪ねる。その両手には、包み紙が抱えられていた。

「これ、ウサギのスモーク。よかつたら持っていて」

「ありがとう、でも助けてもらったのは俺の方だしこれはいただけないよ」

実際、シエルファに助けられなければベレットはどうなっていたかわかったものではない。野犬の贄か、虫の晚餐か、どうプロセスを辿るにしても土に還っていただろう。

「別に余ってたし、さばき方失敗して見た目ちよつとグロくなつたやつだから遠慮しないで。失敗っていつでも頭がそのままついているだけだから」

「いや、それはできれば切り落としてくれないかな……」

スモークによりミイラ状になった皮むきのウサギが一瞬頭をよぎる。

カバンと包みを抱え、道を踏みしめた。外は雲一つ無い青空で、頬を風が涼やかに撫でる。

とぼとぼと街道に続く山道を歩く途中で、ふとベレットは振り返った。後ろには既に後にしたシエルファの家が見える。そして、

——見えなくなるまで見送るつもりかなあ。アイツは。

銀髪を風になびかせ、シエルファが立っていた。

もう遠くだからよくわからないが、言葉少なに別れた時にどこか寂しさと安堵を含んだ表情が見えた気がする。思えば無愛想に見えたのは最初だけで、感情表現は豊かな娘だった。

——親が死ぬ前は、もっと明るかったのかな……ってうおッ!?

突如、ベレットの傍らを二頭立ての馬車が通り過ぎる。危つくひ

かれる所だった。

——なんでこんな山奥に馬車が……あれ？

やがて、黒塗りの車体をきしませ馬車が止まる。停車場所は向こう側、シエルファのすぐそばだ。車体の側面には菱形の図形——恐らくこの地の領主の紋章——が輝いていた。

——領主の使い？ なんの用事だ？

車体を鳴らし、三人の人影が降りた。どれも簡素な鎧に剣を帯びている。無精ひげと短い髪、そしてその職業者特有の殺人に慣れた者の目つき。

——傭兵……か？

彼らは有無を言わずにシエルファの前に立ちふさがった。彼女が退くよりも速く、慣れた動作で馬車へ引つ張っていく。

「お、おい！ お前ら！」

思わず大声を出す。しかしこの近隣には人はいない。いるとしたらウサギか鹿ぐらいだ。

シエルファを乗せた馬車が山道を逆に戻る。またもう一度ベレットの横を通り過ぎようと走った。

車輪に挟まれ、砂利がはぜる。ベレットを無視するように疾走する馬車。

——ど、どうする……ッ？

馬の嘶きが耳を刺す。

——どうするったって、俺なんかじゃ……

ベレットの体はどちらかといえば小柄の部類だ。そしてこの状況では馬車を止める手段も、傭兵達を制す算段も無い。

——……チクシヨウ。

腸に暗い汚泥の積もる感覚。拳を固く握りしめながら、道を譲る。

——……所詮こんなもんだ。自由に生きている気でも、勝てない相手には道を譲るしかない。俺みたいな力の無いガキなら尚更に。

地方領主が土地の娘のさらって遊ぶ。最近では余りないことだが、中央都市を外れた地方では有り得ないことではないだろう。

通り過ぎる馬車の車体を見上げる。せめて助けられない自分を恨めしく眺めるだろうシエルファの顔を見ることが、自分が何も出来ない事への僅かな罰になればと思った。それでもそれが体のいい独りよがりな自虐だと心の片隅でわかっていた。

それでも、それでも、そうせざるにはいらなかった。

無力である事は罪なのだとベレットは知っているから。

——……恨め、せめて俺を恨んで……ッ！？

一瞬、おのが眼を疑った。

窓越しにベレットを見るシエルファの顔は、悲壮に歪まず、絶望に曇らず、ただ凜と微笑んでいた。優しく穏やかに、何かを救えたと安堵するように。

唇が動く。車内のために声は聞こえない。ただ、その動きから何を言っているかをベレットは理解出来た。

——何を、言っただよ、お前は……　なんで、こんな時に俺に「ありがとう」なんていうんだよ……　なんで、そんな風に笑えるんだよ……ッ！

騒音を上げ、馬車が遠ざかっていく。ベレットは道に立ち尽くしたまま、動かない。その手に持ったスモークの包みを見つめながら、強く握り締める。包み紙がクシャリとシワを作った。

「う、うう」

やがて、道の外れ、草原の方を向いて振りがぶる。

「——っうおおおおっ！！」

何かを強く振り切るように、遠くへ包みを投げ捨てた。

それでも風は、穏やかに吹いている。

6、亡霊は無力なる強者

リドボアの地、エスリタ村のやや外れにリドボア領主、ヘスター・リドボアの屋敷が有る。

貴族としてはほどほどの敷地に建つその屋敷は、遠目には如何にも立派な造りに見えるが細かな部分では老朽化が進行していた。通常は予算として割かれる維持費を渋っているからだ。

その中の一室、来客用の部屋にシエルファは連れて来られていた。

――偽物しかない部屋……

怪しげな壺や彫刻などの豪勢な調度品が並ぶ壁や、無駄に装飾の施された机などの家具類が来客を威圧するように並ぶ。それらを目にしながらもシエルファの心は冷ややかだ。

別にシエルファに美術職的な価値換算の出来る審美眼があるわけではないが実際、部屋の調度品は大体見せかけの偽物である。

かつてシエルファのいた部族では「尊い真なる物は目に見えぬ内にある」という教えがあり、理由なく無駄に飾り立てる物は偽物だと考えられていた。

――……惑わそうとする意志しか感じられない。

シエルファとて年頃の少女だ。飾り立てる事に興味が無い訳ではない。しかしその部屋の調度品は「綺麗でありたい」という純粹さは無く、「とにかく己を大きく見せ、誇示したい」という人間臭さというにはいささか醜悪に過ぎるエゴしか見えなかった。

「ああ、部下が手荒だったようだね。どうか楽にしていたまえ」

シエルファが無理やり座らされた椅子、そこから長大なテーブル

を挟んで、椅子に腰掛けた領主へスターがいた。

「君のような女の子を、無駄に怖がらせる意図はなかったんだ。信じてほしい」

好々爺とした笑顔を張り付かせるへスター。しかしその表情は余りに薄っぺらい。

「……私に、一体なんの用なんですか？」

沈黙を挟み、シエルファが静かに口を開く。

冷えた彼女の表情には、一切の恐怖も動揺も見えなかった。窓から差す光が、シエルファの銀髪に反射して、彼女の透明な輝きを足していく。

「君はケイリス人、ノルヴ族の一人だね？ たしか、ノルヴ族は自治居住区以外に定住は認められていないはずだ」

少数民族として帝国の移民となったノルヴ族。しかしその実情は、軍事的圧力によって無理やり迎合させられたに等しい。

迎合させられた少数民族の中でも比較的順番が遅かったノルヴ族に着せられた条件は厳しいものだった。

例外を除き特定居住区のみにはしか住めないのもその条件の一つだ。しかし、終戦の混乱や細かい部族の見分け方が帝国の役人には難しかったため、一度居住区から逃げ出せば戻らされることは余りない。正直領主が一々目くじらを立てる問題ではなかったはずだ。

「それが何か？ 居住区に戻れ、ということですか」

シエルファの表情に変化は無い。ただ、声がわずかに震えた。だがその反応は、へスターを引きつけるには十分だ。

「いやいや、せっかく私の土地まで来たのだからゆつくりすればいい、お嬢さん。なんだったらこの屋敷にいたっていいんだよ？　そもそも居住区に戻らせるなんてそんなことはしない、第一、

——君は彼処に戻ったら殺されてしまっただろう？」

ヘスターの言葉に、シエルファは顔を上げた。間違いない、この男はシエルファがなぜ居住区を出たかを知っている。

「本来、黒髪が特徴のケイリス人、その中でノルヴ族のみが銀髪の女性が生まれるという。

そして銀髪の間人は、ケイリス人の精霊信仰で語られる邪精霊『ウエヌデイガ』に祝福された存在であり、『ウエヌデイガの娘』と呼ばれる。凶を呼び込む災厄の化身と忌み嫌われ、生まれると同時に殺されるそうだね？」

紅く燃える両眼でヘスターを見つめるシエルファ、彼女の沈黙は肯定の印として受け取られた。

「しかし、だ。『ウエヌデイガの娘』には未来を見通す託宣の力を持つという。全くひどい話だ。そんな貴重な力を持つ同族、しかも幼い女兒を殺すとはね。一応は帝国民とは認められているが、やはり奴らどうしようもない野蛮の民、獣だよ」

「……私の一族は、獣じゃない、そして獣はあなたなんかよりずっと綺麗で純粋な存在よ。あなたに獣を野蛮と嘲る資格は無いわ！」

弾けるようにシエルファが叫ぶ。残された最後の誇りを守るため、少女は怒りを表す。精霊信仰のノルヴ族において、獣とは自然の恵みと脅威であり現出する精霊信仰の顕現だ。狩猟し、闘い、崇拜す

る。ただ崇めるだけではない複雑な、なおかつ対等な存在だと認識している。その考えはノルヴ族居住区とは離れて暮らすシエルファにも、今は亡き父の教えとして血肉として根付いていた。

「私には、未来を見通す力なんてない！ そんな、そんな物が見えるなら、最初から私は……」

その顔に再び悲しみの影が宿る。

「最初から、自分で死んでいた……」

「未来が、見えない……？ そんなはずは無い。ならばただの小娘が教会に手配をかけられるはずがない！」

領主のシワだらけの手が机を叩く。

「大人しく私に協力すれば、教会に引き渡すのは勘弁しようというのだ！ お前のような存在に帰る場所も逃げ場所も有ると思っているのか！？」

怒号が飛ぶ。もはやヘスターは好々爺の仮面を捨てた。なんとしても未来予知の能力者を手に入れようとする醜い我欲が表出する。

「——なぜ、なぜ未来予知なんて荒唐無稽な物を信じているんですか！？ そんなもの有るわけ……」

「黙れ！ お前の選択は協力するか死しかない！ 考えを改めないのならしばらく頭を冷やして貰おうか。おい」

ヘスターの促しにシエルファの傍らにいた傭兵の一人が反応。

「……なに、止めて！」

彼女の細腕を掴み、強引に部屋の外へ引きずっていく。
閉じられる扉、部屋に残ったのはヘスターと、それまで気配を消していた蛇の傭兵ガドス。

「——あの小娘の言うことも一理ありますね、雇い主」

「貴様まで一体なんだ！」

ヘスターの怒鳴り声にも表情一つ変えないガドス。喉からわずかにうめくような笑い声が聞こえる。

「いやあ、考えてみれば妙な話じゃないですか？ 本当に未来予知ができるなら、——なんで俺たちに捕まったんです？

予知できれば逃げられるでしょうに」

当然の指摘、本来完璧に未来予知が出来るならそんなミスは有り得ないはずだ。

「いや、それは……なにかアクセシントで予知できなかったとか、予知に制限があるとか」

口ごもるヘスター。ガドスの指摘は間違い無く確信をついている。

「予知が出来るならそのアクセシント自体もわかるんじゃないですかね？」

「そんなはずは、もしあれが予知ができないなら私は……破滅……」

青ざめる表情、ガリガリとヘスターが左手の爪を噛む。不安な時の癖であることをガドスはすでに感じていた。

「——と、いうことを俺たちが話し合い、予知者ではないと考えてあの小娘を離す、という所まで予知しているかもしれないねえ、雇い主？」

「お前は、誰の味方なんだ！」

「いやいや、未来予知が出来るならそれだけなんでもありということでしょう。だったら俺たちなりに未来予知だと見極める方法を取ればいい」

「……何を、する気だ？」

ガドスの顔が、鋭く、暗く歪む。

「予知者でないとわかったら殺す、そう確実に決めとくんですよ。予知が出来なきゃ死ぬ、出来れば生き残る。予知者でないとこまかせなくすればいい。」

——予知者でも死にたくないほうへ行くでしょう」

あまりにも、邪悪な笑みを蛇は浮かべていた。

「……わかった。予知者でないとわかったならあとはお前たちの好きにしる」

ヘスターはその間に耐えられず、眼をそらす。

「これはこれは雇い主、ありがたき幸せ。——あ、まだ未定でした

ね

それはひたすらに待っていた。

——ま……だか……

暗き闇の中で、己の存在が溶けてしまうかと思うほど長い間、待ち望んでいた。

——もう、あの声を……聴きたくは無い……

よじろつにもその身は動かず、涙が出なければ慟哭さえもできない。ただ存在し、目の前の事象を見ることしか出来ない。

——これ……が……我が輩の……贖罪か？

二百年の間、己に問い続けた答えの出ない問い。今日も、そして明日も答えは出ない。

その意識に、過去が映像が蘇る。夕日に佇む軽装鎧の女性。情熱に燃える赤火の両眼、生命力に溢れる褐色の瑞々しい肌、均整の取れた甘やかな肢体。

そして、荒野の風にたなびく、背にした太陽の光をきらびやかに反射する銀髪。人の形をした、燃える夕日のような女性だった。

——君を……守れなかった罰なのか……エイダ……

二百年の孤独、その思い出だけが、その守れなかった記憶だけが、

その意識をつなぎ止めていた。

——我が輩は……いつまで、償えばいい？

答えるものは誰もいない。

——……？

ドアが開く音、暗闇に不意に光が刺す。長方形に空けられた光、その中に佇む人影。

華奢な少女のシルエット、逆光の光に彼女の銀髪がゆれる。

——……エイ……ダ……

それはもう一度、愛する女の名を呼んだ。

7 少年は、過去を振り返る（前書き）

今回、ちょっとグロいです。

7 少年は、過去を振り返る

高い天井を持つ広大な部屋の向こう側を、雑に積まれた古道具が占領していた。

床に積もった埃は、本来は剣技の訓練場として使われた地下倉庫（ここ）にその厚さの分だけ人の往来が無かった事を知らせている。

否。

誰かが来ていた。床についた新たな靴跡。扉から続く靴跡の列は、部屋の傍らにある古道具の椅子に続いている。

椅子に座るは一人の少女。長い銀髪が揺れ、華奢な体躯が軋む。傭兵に入れられた牢獄代わりの地下室の中でも彼女、シエルファの心には平穏があった。閉じ込められて早十時間は経ったろうか、外はもう夜だろう。

——これで、いいんだ……

傭兵の去り際に点けられた、魔力によって点灯する魔術照明の薄暗い光に照らされながら、彼女の心には最後に会った少年の顔が映っていた。

——私がここで死ねば、ベレットには危険が無いはず……

それは決意。死を賭してでも、自らの運命に抗うと決めた意志の力。

——これで、「力」に振り回される生き方を終わりに出来る……

不意に、最後の三日間が頭をよぎる。それは父親が死んでから、初めて安らぐことが出来た日々だった。

孤独は、孤独である時にはそれを感じない。孤独でなくなった時、初めて孤独だった事を自覚する。

ベレットとの日々は、シエルファの殻に確実なひびを入れていた。

——もう一度、会いたかったな……

それは、堤に開いた一穴。閉じ込めることに慣れた感情が、流れだすには十分な隙間。

——……会いたい。

胸がつまる感覚、静かに頬を伝う水滴。死を覚悟し、運命に逆らうと決めた少女は、気がつくまで泣いていた。

——……もう一度だけ会いたいよ、ベレット……

助けが欲しいからでもなく、先が見えぬ不安ではなく、死の恐怖でもない。ただ一人でいる寂しさに少女は泣いた。いつから自分はこんなに弱くなったのだろうか。父を葬った時、もう泣かないと、泣く資格は無いと決めたはずなのに。

気がつけば、あんなにも慣れた孤独が今はもう耐えられないほどに辛い。

「う、うっ……」

口に手を当て、声を押し殺す。せめて泣き声だけは誰にも聞かれ

たくなかった。

『——おお、愛しき君よ、夏の日々よりも輝かしき君よ』

突如、部屋に男の声が響いた。低い、渋みのある中年の声。

『——夏の日々と君は比べるべくも無い。君のほうが美しく、安らぎに満ちているからだ』

朗々と、歌い上げるように優しく言葉を紡ぐ。

『——夕立の雨は可憐な花を散らし、日差しは時に強く肌を突き刺す。夏の日々が美しいのは、ほんの少しの神の気まぐれの間のみ』

「——誰、なの……？」

その声は、ガラクタが置かれた部屋の隅。

大柄な、年代物の黒甲冑から聞こえていた。

青銀の異神鎧使い、後に「先生」と呼ぶことになる女性に連れて来られた場所は、孤児院だった。

見かけは僻地にある広大な天主会の修道院、古びた建物は厳かかつ神聖な空気をまとっていた。しかし、少年はすぐにその影の部分を眼の辺りにすることになる。

「……ここは、」

見渡す光景に声が出る。

剣撃が成り、剣閃が光る、数人の人影が修道院内部の広場で剣を交えていた。どれもが当時十才の彼より同じか少し上程度の幼い少年や少女達。しかし彼らの顔には年相応の笑顔は無い。誰もが必死に訓練用の木剣を振るっている。これだけが、生き延びる手段だとも言つように。

「イ、イデイスさん……」

助けを求めるように、彼は黒髪の子へ視線を向ける。ここに来るまでの道中、女——イデイス・ロットと女は名乗った——は少年に優しくしたからだ。彼にとってすがれる対象は今はいデイスしかなかった。

「良く聞け」

流れるような長い黒髪と白き肌、美人だが、圧倒する覇気のある二十代の女性、イデイスの声は冷たく、感情を感じない。水晶のように冷たい眼差しで少年を見下ろす。道中にあつた優しさは、完全に消えていた。

「お前の身内がない以上、このまま別の孤児院に行けば、ほぼ八割り死ぬ」

成長してから確かめたことだが、この言葉は事実だった。極一部を除き、孤児院では口くさ教育さえ施されず、食い物にされるか、ストリートチルドレンとして放逐される。いずれにしろ短命に終わるだろう。

イデイスの手が少年の肩を強く、掴む。

「だが、この修道院の孤児院に残れば、相応の教育と待遇を受けられる。

……死と隣り合わせの訓練と任務を切り抜けねばならないがな。

だが、少なくとも前者よりもお前は自分の力で運命を『選ぶ』ことが出来るだろう。

お前は、どちらを選ぶ……？」

イデイスの冷たい眼に僅かに熱が見えた。「こちら側を選べ」という意志を感じる。

「……ぼ、僕は」

少年は泣きそうな眼で迷いながら、それでもより運命を「選ぶ」道、この修道院で暗殺者を目指す道を選んだ。

その日、初めて少年はイデイスを先生と呼んだ。

そしてその三年後、少年は暗殺者組織より逃亡をはかり追われる身となる。その追跡者の中には、かつて共にくらした孤児院^{ホーム}の仲間達もいた。

——なんで俺こんな事やってんだろう？

ぼやくように内心で呟きながら、ベレットは領主邸内廊下を音も無く走り回っていた。

——とりあえずシエルファを見つけないと……！

シエルファがさらわれるのを見送ったあと、即座にベレットは近

くの街で領主の情報収集を開始した。

予想通り領主の噂は芳しく無く、というか最悪だ。特に戦争中に戦地で雇った傭兵が、そのまま警護の兵として働いているそうだが、そいつらが特に悪い。

『ここ数ヶ月で若い娘や子供が何人も行方不明になっている』

『近くで目撃されるのは領主の紋章付きの馬車』

『数ヶ月以前は娼婦の失踪が相次いだが、今は仲間うちで警戒しているらしく流れの娼婦はこの街にこない』

『傭兵達は街の酒場や娼館でよくたむろしている。粗暴も悪く、特に隊長格の男が得体が知れない。しかも異神鎧を所持していると吹聴していた』

街の商人や住人から集めた情報はすぐに一つのものに繋がった。ベレットの予想以上に凶悪な事態だ。

——どー考えても「最初は娼婦でお遊びを楽しんでいたのを、ターゲットがいなくなつて街の女子供にマトを移した」だよなあ。

街に警察はあるがどうみても領主とはズブズブのお熱い関係。マトモな捜査は期待出来ない。

——やるしかねえか。

正直、旅の途中こそ泥の真似事はやったことがある。潜入しながらターゲットの位置を探る訓練は「孤児院」にいた頃に受けていた。出来る技量はベレットに揃っている。

——あとはシエルファが無事かどうか。

夜を待つてから見張りの兵士の隙をつき、邸内に侵入出来たはいがシエルファのいる場所の見当がまだつかない。

屋敷の規模のわりには使用人の数が少なく、邸内を見回っている兵士もあまりいない。探索はしやすいだろう。隊長格が持つという異神鎧、そもそも本当に所持しているかさえ不明だ。持っているハツタリをかます人間もそれほど珍しいものではない。

——長居は禁物だけだな。

現在は邸内一階、この屋敷で人間を監禁するとしたらはたしてどこか。

——ッ！？

部屋から出て行く兵士を発見。足を止め、壁の影から様子をうかがう。薄ら笑いを浮かべながらさつていく男。

——……なにやってやがった？

一瞬、悪い想像が頭をよぎる。それを振り払いながら、兵士が完全に去つたのを確認。部屋の前に立つ。

——鍵が閉まってるな。

先程の傭兵がかけていった、ということは個人部屋ではなく、この中には厳重に管理しなければならないものか、閉じ込めなければならない誰かがいるはず。

る。

——…？——ッ！う、うつ…

一瞬、目にした物が理解出来なかった。理解した瞬間、吐き気がこみ上げる。

ベレットの予測は外れた。部屋の中にあつた物は、閉じこめられた人ではなく、嚴重に管理すべき物でもない。

それは、絶対に部外者に見られてはならない状態の人だった物。

立っていると、初めにベレットは思った。だがそれは違う。

左右に伸ばされた両手首に短剣が突き刺さっている。ダラリと力無く下がった頭、そこから揺れる赤毛の長髪。白い肌に、飾りつけのように重ねられた生々しい傷。張り付けの刑の様、壁に縫い止められ自らの血で化粧を施された女の死体だ。

——…あいつら。

そして首元には、まるで祝福の花輪のように裂かれた腹から伸びる腸が緩く巻きついていた。

——…殺し自体を楽しんでやがる……！

事態の最悪性はベレットの想像を越えていた。

今更臭ってくる血と精液の臭いに再びこみ上げてくる吐き気をこらえる。今この場に自分の痕跡を残すのはマズい。

——シエルファじゃない……

女性の顔を確認、シエルファではないとひとまず胸をなで下ろす。
近隣の住人だろうか、体の硬直具合から、殺されたのは二、三日前。

——ヤバすぎる、早く探さないと……

焦燥に駆られながら、部屋を後にした。

8・地下室の怪物

『——美しきものはみな流転し、変わりゆく。私に出来ることは美しかった一瞬を記憶の中に切り取ることのみ』

「あ、あの……」

堂々と、そして哀切を込め言葉を歌う。シエルファの問いかけも聞こえないかのように男の声に淀みはない。

『——しかし、君という夏の日、永久に変わる事は無く、永久に枯れる事も無い。過ぎゆく日々が、更に君を輝かせるだろう。君に捧げるこの詩の中に君が生き続ける限り、その美しさは永久に語り継が……』

「——話を聞いてっ！」

しびれを切らし、思わず叫ぶ。そろそろ止めなければ終わらない気がした。

『——おお、これはすまない、お嬢さん（フロイライン）！
我が輩とした事が、乙女に声を荒げさせてしまうとは』

なにやら芝居がかった口調、やたら尊大かつ丁寧に喋りだす。

『いやはや、我が輩、美しいお嬢さんに初めて話かける時は、詩神と詠われた吟遊詩人シャイヤードが歌った「夏の君へ」の八番を歌うことに決めておりましてな。シャイヤード、好きですか？』

「シャ、シャイヤード……?」

シャイヤード、かなり昔の詩人だと聞いたことはあるが、それ以上のことはシエルファにはわからなかった。

「……ごめんなさい、よくわからなくて」

『……え、知らない? ——あー、いやいや、あんな古臭い詩人などお若い方が知らなくても無理はありません。古い物をありがたがるなど老人の余生の趣味、可憐な方には合わぬことです』

あつさりと趣旨を変える。どうやら会話の接点にならなければ特にどうでも良かったらしい。

「あの、あなたはどこにいるんですか……?」

部屋のどこを見渡しても、人はいない。そもそもシエルファが入ってから誰も来ていない以上、最初から誰かがいたとしか考えられない。

だが、最初に入った時、部屋の明かりはついていなかった。シエルファの怯えに気づいたのか、男は親しげに話しかける。

『ああ、どうか怯えないでもらいたい。我が輩に君を危害を加える意図は一切無い。信じてくれ。それから、実は我が輩はすでに君の目の前にいるのだよ』

声は眼前の、黒い甲冑から響いていた。

埃が積もり、すでに白っぽく見える表面、馬上騎乗を条件とした

重装甲は魔術戦闘による機動戦が発達した現在ではまさしく骨董品だ。

シエルファは静かに甲冑に近づき、恐る恐るその装甲に手を当てる。

人の気配は無い。だがたしかに声はこの物言わぬ甲冑から聞こえていた。

「この中に、いるの……？」

『「この中にいる」君のその言葉はある意味では正しく、ある意味では正しくない』

シエルファの手に、男の言葉と重なる振動が伝わる。

「あなたは……」

少女の胸に驚きが広がっていく。

『そう、我が輩はこの甲冑の中にいるのではない。この甲冑自身なのだ』

「甲冑……なの……？」

『そのとおり、我が輩としたことが申し遅れた。』

我が輩はゼクツェン・ジャルトン・クルツフ。貴族であり爵位は伯爵、経歴は軍人。

この甲冑の元の持ち主であり、今は魂のみがこの鋼に宿っている。さしずめ「放浪する鎧（リヴィング・メイル）」といったところかな？

気軽に親しみを込めて「伯爵」と呼んで頂けると嬉しいかな』

にわかには信じがたい、しかし否応無く事実。
物言う鋼は、さらに軽快に言葉を続けた。

『君のような麗しいお嬢さんに話しかけるのならば、なにか贈り物の一つでも携えるのが礼儀なのだが、憎たらしいことに身動き出来ないこの身では野の花を一輪摘んで捧げることさえ不能だ。実に、紳士に在らざる醜態だが、ここは許してもらいたい』

どうやらこの甲冑の状態から動くことは出来ないらしい。

『このような不躰な様で申し訳ないが、よろしければお名前を聞かせて貰ってもいいかな、お嬢さん？』

一瞬、迷う。この明らかに怪しい自称「亡霊」に名前を明かさずべきか。だが、

——……迷っても、仕方ないよね。

死を覚悟したこの状況で、今更身の安全を確保して何の意味があるだろうか。

「……私は、シエルファ・リーン」

『ふむ、シエルファ・リーン、実に優しげな名前だ。……よろしければ、シエルファと呼んで構わないかね？』

一体どこで見ているのかはわからないが、頷く彼女を認めた甲冑の紳士は今度は今まではトーンを変えて語り出した。

『この屋敷の傭兵達に君は捕まっただかね？
いいかい、落ち着いて聞きたまえ』

声に緊張が宿る。シエルファに余計な恐怖を与えないように、慎重に鎧の紳士は言葉を選ぶ。

『この屋敷で、その傭兵達はとても恐ろしいことをしている』

「とても、恐ろしいこと……？」

不安にシエルファの肩がすくむ。

『君のような女の子には伝えられないようなおぞましい諸行だ。
だから、なんとしてもこの場から逃げるんだよ。ここに止まっては
いけない』

ゆつくりと、落ち着いて話す伯爵。その冷静さが、返って状況の
緊迫さを伝える。

『君に、御家族や知り合いはいるかね？ 出来れば助けに来てくれ
るような人は……』

静かに首を振るシエルファ。

「……家族は居ないわ。他に助けに来てくれる人も……」

不意に少女の胸の中に、少年との記憶が走る。

「——ベレット……」

なぜだろうか、少年の名が自然と唇からこぼれ落ちた。すがっ
はいけない、助けを求めてはいけないことはとうにわかっている事
なのに。

『——ベレット？ その人間が、君を助けに来てくれる可能性があ
るのかね？』

彼女は顔を上げ、再度首を振る。

「違う、違うの伯爵。ベレットは、私が助けた、私と同じくらいの
年の男の子。山賊に襲われて倒れてた所を助けたの」

『……ふむ、山賊に——？』

思い出す。雨の中、初めて彼を見つけたあの時を。彼を手を握り
締め、助けることを決めたあの感触を。

「もう、ベレットは旅立ってしまったから、戻ってはこないわ。――
ねえ、伯爵、私、私ね……」

少女は微笑んでいた。今の状況も、未来に立ち込める危機も、そ
んなものはまるで関係無いかのように、心から嬉しそうに微笑んで
いた。

「——初めて、誰かを救うことができたんだ。
今まで、ずっと誰かを犠牲にしか出来なかったけど、やっと人を助
けられたの。
だから私は、それでいい、それだけでいい。
ここで終わってしまったてもそれでいいのよ」

『……君は、やはり——？』

伯爵の言葉が詰まる。まるで、絶対に当たって欲しくない予測が、今眼前へ突きつけられようとしているような鋭利な緊張。

「ねえ、伯爵。一つ聞いていい？」

「む？——うむ、何かね？」

「どうして、私に話しかけるのがあんなに遅かったの？ もっと早く話かけてくれても良かったのに」

シエルファの問いに、緊張する伯爵から一転して笑い声。

『——ハッハッハッ、いやそれは済まなかった。実は我が輩、見知らぬ女性に話しかけるのは苦手でね、そちらから一つ話し掛けてくれないかと、「寡黙かつダンディ、それでいて存在感のある質実剛健な紳士」という雰囲気を持ちつつ待ってみたのだが……』

伯爵の声に若干の恥じらいがこもる。

『しばらく待って気づいたのだ。「我が輩って、黙ってたらただの鎧にしか見えない。というか見えないわけがない」ということにな』

「——プッ、」

思わず、シエルファは吹き出してしまった。

「フ、クク、……あはははは！ そんなの、当たり前じゃない」

『いやあ、全くその通りだ。……やはり君はそうやって明るく笑っているほうが可愛いよ。さっきのような全てを諦めて、寂しい微笑みを浮かべてはいけない』

ようやくと年相応な、明るい笑顔を浮かべた彼女を見て、紳士は胸をなで下ろす。

『シエルファ、もしどうしてもここから出る方法がなければ、最後の方法がある』

「……最後の、方法？」

『我が輩と契約を……』

カチャツという小さな金属音がドアから響く。思わずシエルファの背筋が凍った。

——誰か来た……？

注意を払い、ドアを凝視する。カチャカチャと音が連続した。どうやら鍵で開けているようではないらしい。

やがてカチリという小気味いい音と共に、動きが止まる。

ゆつくりと、余計な音を立てないようにドアノブが押された。

静かに開くドアの隙間から、小柄な人影が覗く。まだあどけなさの残るその顔を見て、少女は思わず声を上げた。

「——ベレット！」

「……シエルファ！ここにいたのか……大丈夫か、何もされてない？」

静かに駆け寄る。彼女が無事な様子を知ると、静かに息を吐きだした。緩んだ緊張に、どっと力が抜ける。

「無事で良かった…… シェルファ、急いで屋敷を出よう。ここに居ちゃ危ない」

彼女の手を引く。二度と離さぬように握った。

「……ベレット、この屋敷じゃ一体何をやっているの？」

少年は、先程見た犠牲者の惨状を思い出す。苦痛に歪む顔、刻まれた肌、凝固した血液、鼻を刺す臭い、嘔吐感、怒りと恐怖。

「——非道い、とても非道い事だ。人の苦痛を楽しんでいる人間がいるんだよ。……だから、早くここから逃げ」

ベレットの言葉が途中で途切れた。

「——ぐ」

走る衝撃。崩れ落ちる体。失う平行感覚。ブレる視界。

「ベレット！」

彼女の言葉が遠く聞こえる。

倒れゆく少年の後ろで、歪んだ笑顔が立っていた。右手には砂袋ラフィン・フェイス
ブラック・ジャック

「——やれやれ、ネズミってのはどこから入るかわかったもんじゃない。あんたもそう思うだろ、お嬢さん？」

笑う蛇、ガドスは楽しげにシエルファへ声をかけた。

夜明けは、まだ来ない。

——ぐ……や、りやがったな、クソツタレ……

やけに長く感じる数十分の後、ベレットは床に倒れていた。全身に走る痛みにもがく。熱を帯びる無数の打撲に対し、頬に当たる床はただひたすらに冷たい。

「もう止めてっ！ ベレットは関係無いでしょ！」

少女の悲痛な声が聞こえる。身を引きちぎられているような、悲しい叫び。

周りには装備をまとった十数人の傭兵達。昏倒した所を奴らに囲まれて散々踏まれた。とっさにホームで習った知識を活用。頭と内蔵を庇う体勢を取ったため、ダメージは最小限で抑える事が出来た。

「黙れ！ 関係の有無は私たちが決める事だ！」

彼女のそばにいた短躯の中年、おそらくは地方領主のヘスターが怒号を飛ばす。

愉しげに、ベレットを見下ろすはガドス。喉を鳴らしながら、

「よう坊主、お嬢さんから聞いたぜ？ 助けに来たんだって？ 大

したもんだ、全くカツコいいねえ

——さて、関係無いっていうなら、この小僧がどうなってもかまわんわなあ？ お嬢さん。助けられた恩を返しに来たというのに、ずいぶん薄情じゃないか。それとも……」

蛇が、引きつる。

「——予知者のお嬢さんにはこの彼氏が助かる未来でも見えてるのかい？」

——……予知、者？

超高位の魔術士には、半ば現実を逸脱した魔術を扱う者もいるという。まさか彼女もその一人だというのか。

——あいつが魔術使う所なんざ、見たことないぞ……

百歩譲ってそれほどの高位魔術士ならば、単独で傭兵達を退ける能力があるはずだ。そして彼女への扱いを見るに、傭兵達もシエルファを魔術士とは考えていない。

「私には、未来なんか見えない！ お願いだから、ベレットをもう傷つけないで……お願い、だから……もうやめて……」

消え入りそうに、彼女の声が弱まる。抗えない現実が、シエルファの抵抗する力を奪っていく。

——なっさけねえなあ、チクシヨウ。

ふらつく頭を必死に動かす。何が何でも、この血に飢えた怪物共

から彼女を助けたかった。そして何よりも、

——泣くんじゃねえよ、シエルファ。

彼女の泣き顔を、見たくはなかった。

「……おか、しいじゃないですか、兵隊さん」

痛む体を上げる。必死に頭脳を回す。この場を切り抜けねばならない。そのほうがたとえ死しても、幾分ましな死に方に思えた。誰かを助けて死ねるのならば。

「……あの部屋の中で、あん、たら何を、やってたんですか？」

シン——と、ガドスの笑いが止んだ。周りの部下達の薄ら笑いも止まる。

ただ一人、ヘスターが挙動不審にベレットを見つめる。

「……土地の住民を、拷問して殺す。自警団ぐらいは鼻薬でごまかせても、中央の軍警察にタレコミしたらどうなるんですかね……？」

「おい！ お前らアレを見られたのか！？」

ヘスターの怒鳴り声を無視してガドスはベレットを観察する。

「……俺が、わざわざ一人でここに来たと、兵隊さん方は本気で思ってるんですか？」

ブラフを打つ。例えあからさまなウソでも、「疑惑」という僅かな綻びを作れば、そこを足掛かりに付け入る、付け入って見せる。

「——フウン」

しかし、蛇の態度に変わりはない。

「なかなか面白い坊主だ。だがな、軍警察とはいえ、地方領主の屋敷に明確な証拠無しで踏み込みは出来ないんだよ。——お前に仮に仲間がいたとして、軍警察を動かすほどの人物にツテがあるか？ 何か証拠を持っているのか？ ただの巡回商人の小僧に何が出る？」

——……この蛇野郎、冷静すぎる！

このガドスという男、生半可な脅しや疑惑では崩れない。そして付け入る隙ができれば、確実にベレットを口封じしてくるだろう。

「——なんでだよつ、なんであんな事をやってるんだ！ 苦しめて、殺して、それでなんの得がある！？ 戦争はもう終わったんだぞ！」

弾けるように問う。あの残虐をする理由は一体どこにあるのか、いや、理由そのものの自体があるのか。

「——戦争はまだ終わっていないのさ、坊主」

ガドスの眼に宿る喜悅の色。

「かさぶたつてあるだろう？ あれは体の傷だけじゃない、魂にも出来るのさ」

「……は？」

突如始まる関連の见えない話に、呆けた声を出すベレット。ガドスは構わず話を続ける。

「戦争中、俺の部隊はウォルタ山の森林で戦っていてな。森林地帯に潜みながら少数で多数をかき乱す攪乱戦術が主な任務だった」

ガドスの視線は遠い場所を見ている。戦場の空気を思い出しているのだろうか。

「そういう場合、まず一番大事なのは、いかに『敵の士気』を削ぐかでな。大群なら大抵の兵は徴兵された農夫や獵師、俺らのような専門の兵隊は数が少ない。

だったら、一人でも倒すのではなく、士気を削り退散させやすくするのが得策なんだ」

補給に限りがある以上、個別撃破でも限界があるだろう。直接的な戦闘を避けるのは確かに得策だ。

「でな、一つ発見したのさ。敵の行軍する場所に、出来るだけエグい殺し方をした死体、それも拷問を連想させる状態で放置しておくとな——敵の士気をよく削いでくれるんだよ」

——……それである殺し方を。

ホームにいたところ、ベレットも学んだことがある内容だ。幸いベレットには実践する機会はなかったのだが、拠点内部などに潜入したい、動物や敵兵の死体をわざと見せつけて、ターゲットの動揺

を誘う手法に酷似している。

「でなあ、色々試したんだ。若い兵士、年食った兵士、下っ端に隊長格。どいつが一番、どんな殺し方で晒せば士気を削げるかをな」

ガドスの脳裏に蘇る、悲鳴、血の赤、森と血膿の匂い。ありありと思い出せる。

「おかげで色々わかったよ。人はなかなか死なないし、なにより人の死に様は美しいもんだ。——さて、坊主、死体を晒すなら誰の死体が一番士気を削ぐのに効果的かわかるか？」

「——女、か」

「ご名答、正解だ。近隣の村や集落の子供や女をさらってきてな、殺して晒すのが一番敵がビビるのさ」

狂気の告白。ガドスの口調が次第に高揚していく。

「今でも思い出す！ 死体を見て腰を抜かす敵共の間抜け面っ！ 悲鳴っ！ 嗚咽っ！ 楽しくってしょうがなかったよあの頃はさあ！」

ガドスの中で、手段と目的が完全に入れ違っていた。「生き延びるために殺す」から、「殺すために生きる」へと変貌を遂げる意識。戦争が生み出した狂気から、生きた凶器へ。

「……でもなあ、戦争が終われば、それも駄目になっちゃう。おかしいだろ？ 昨日は合法でも、明日になりゃ犯罪なんてよお」

まるで世の不条理を告発するようにベレットへ問うガドス。

——……戦争中でも民間人殺すのが合法なわけねえだろ！

内心を押し殺し、沈黙を守る。この男は、冷酷に、冷徹に、冷血に、狂っていた。

「終戦後、二年経ってからかな、久しぶりに女を一人、戯れで部下に殺らせてやったんだ。そうしたらよお、お前、躊躇しやがるんだ。その部下がな。」

そいつだって戦争中、喜んで殺しまくったんだぜ？
で、気づいたんだわ。

——ああ、コイツら魂にかさぶたができてやがるってな」

話がようやく最初へ繋がる。

「戦争中、殺しにいくら慣れてもな。戦争が無けりゃだんだん慣れが元に戻っちゃうんだよ。」

魂に傷をつけまくれば、誰を殺しても痛みも何も感じなくなるのに、かさぶたが出来て傷が治りかけちゃってる」

それは常人ならば普通の反応。非日常から日常へ帰還するための心理的变化。そしてその中で心を壊す兵士もまた少なくはない。

しかし、狂気の蛇はそれを許さない。

「だから俺は剥がしてやることにしたんだ。鍛錬ってのは大事だろう？」

——変わらないさ、変えてやるものか。誰一人、戦争以前と変わらなくしてやるよ。そうすりゃ、戦争は無くならない」

この男の魂には、今なお戦火が燃えている。熱の無い、青い炎が今なお生者を燃やそうと渦巻いていた。

「さあ、話がずれたな。お嬢さん、あんたに本当に未来が見えるか見せてくれ。出し惜しみ無く気前よく頼むよ。さもなきゃ——
おい」

顎で刺す蛇の傭兵。意を読んだ仲間の一人が剣を引き抜き、ベレツトの元へ近寄っていく。

——俺を使つて脅すつもりか！

「もう、もうやめてください！　お願いですから、やめて……」

「お、大人しくせんか、小娘！」

叫ぶシエルファをヘスターが抑える。先ほどのガドスに覚えた恐怖を拭いながら、彼女に言うことを聞かせようと腕を掴んだ。

「大人しく、お前の予知を見せる！　さもなきゃあのガキは……」

「だからっ！　未来を見通す力なんて、そんなものはないんです！　私が、私が持っていた力は……」

そして彼女は語り始める。
自らの「力」に呪われた運命を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3876w/>

残骸の騎士の英雄譚

2011年9月23日21時03分発行